

宝箱

この1年間、いろんなところに行き、いろんな人に出会いました。こんなにたくさんの人と出会ったのは、生まれて初めてのことです。活動中に出会った人、散歩中に出会った人、出合いがきっかけで休日にもその家に遊びに行くようになった人も一人じゃ寂しいだろうとお花をくれたおばあちゃん。畑を耕すのを手伝ってくれたおじいちゃん。私にこっそりお菓子をくれた男の子。すぐリアルな寮山子を作っているおじいちゃん。私が協力隊だと知ると「私の家はここだからいつでもおいで」と言ってくれたおばあちゃん。年賀状をくれたおじいちゃん。虫さんたちと仲良しなおばあちゃん。車ですれ違うといつもあいさつをしてくれる人。自分の家に泊めてくれたり、その家の子のように接してくれた人。車があるか、家の電気が点いているかをいつも気にしてくれた人。「お手紙書いてね」と住所を教えてくださいました。「お手紙を書きたいから住所を教えてください」と言ってくれる人。

帰るときには「またおいで」って言ってくれる…。だからまた甘えて行っちゃおう…。
素敵だなあ。「こういう人にもなりたくないなあ」と思える人たちにいっぱい出会えました。感謝しきれません。
それに、改めて「いろんな人があるんだなあ」って実感しています。一人一人に個性があって、こんな人ばかりいたら大変かもしれないけれど、そういう人がいるから面白くて楽しくて。毎日がそんな感じでした。
「こんなに小さな町にいろんな人が集まっていて、宝箱みたいなだね」と、ある人が言っていました。これは協力隊で全国各地に派遣されているどの隊員も考えることかもしれません。それだけたくさんの人と出合い、深く付き合ってくれた証しなんだと思います。

方言

こんなに出会いの多い生活をしていたので、いつの間にか、いろんな人と初対面でも気軽に話せるようになり、人見知りも少し治りました。
もう一つ、この町に来て変わったことがあります。それは「敬語を話さなくなった」とい

うことです。話せないわけじゃなくて、方言で話そうとする敬語じゃなくなるんです。方言は「相手との距離を縮める」気がします。
最初はあえて方言を使うようにしていたけれど、次第に自然と出るようになってきました。
お陰で「こっちの言葉をしゃべるようになったなあ」と言われることが多くなってうれしいです。でも、「どっちかというと古い衆が使う言葉を使うね」と…。確かに、比較的年寄りと関わるが多かったから、これはもう当然のことです。
私は方言の中で「やいやい」が好きです。意味はともかく、音が好きなんです。会話の中でこれを自然に使えるようになりたかったけれど、そこまでには至りませんでした。

もう一つ好きなのが「しょんない」。これは1日に1回は聞いてるんじゃないかっていうくらいひんぱんに使われている気がします。標準語で「しょうがない」と言うよりも優しい感じがする言葉です。その意味自体は良くないイメージだけど、これを面と向かって言い合える人がいるって、それだけの関係があるってこと。すごくうらやましいと思っていました。私も

「しょんないやつだな」と言われたことがあったけれど、実は結構うれしかったんですよ。

広報

「あの子は誰だい」「誰だっけねえ、あんた知ってる?」「誰々さんちの子じゃないかい」「いや、違うら」…。

初めて訪れる場所では、こんな会話が聞こえてきます。「私は協力隊で来ています」と伝えると、「どっかで見たことある」と思ったら広報に載ってる子だね」って。

私が誰だっけ分かれれば、もう仲良しなんです。
「また町に戻ってくればいいよ」「お嫁に来ればいいよ」「良いところだから、この地区に来てね」「うちの息子はどうだい」…。
どこに行っても、こんな会話をしていたような気がします。
広報で：って言えば、大抵の人が分かってくれるんです。初めて会う人との壁をすごく薄く

してくれました。

「いつも読んでるよ」「楽しみにしてるよ」という声とか、載らない号があったら「今月は載ってなかったっけね」って言ってもらえたり。松ぼっくりを持っている写真が載ったら「松ぼっくりの子だね」って言ってもらえるのが、すごくうれしかったです。

文章を書くのが苦手な私には大変な作業だったけれど、みんなの声に背中を押されて、何とか最終話まで書き上げることができました。

実家

4月から、大学に戻ります。ここを離れるのは寂しいけれど、私にとって川根本町は、またいつでも来られる実家のような場所になりました。
ふらつと足を運ぶときもあると思います。お茶をお手伝いに来たり、神楽を見に来たりするかもしれません。

その時はまた「広報に載った子だねえ」と思い出ししてくれるとうれしいです。

たくさんの人と会い、その人たちの生活を見ながら、自分も地域の一員として生活を送ることで、こういった生活が人間本来の暮らしのあり方なのかなと思えました。

家に一人でいても誰かが遊びに来たり、自分が遊びに行けたら、周りの誰かが私のことを知ってくれているから安心感があつたり…。近所や家族の人たちとの関わりがあることの大切さを実感しました。

私は社会福祉を勉強していて、将来はその道に進みたいと考えています。この町で経験した人間関係や地域との関わりを大切に、日常生活を送っていきけるような、そんな支援ができる人になりたいなと思っています。
今年1年、本当にかげがえのない時間を過ごしました。全ての人に、全ての経験に「ありがとう」を贈ります。

この町は、私にとって 実家のような 場所になりました――

文章が苦手。毎月、原稿依頼をされると、しぶい顔をしながらパソコンとにらめっこしていた。そんな美智子さん、この1年で何を学ばせたと聞くと「出会いの大切さを知った」と話した。この町で温かな人々と触れ合った経験が心を打ったからだろう。文中語った「実家」という言葉は、最大級のほめ言葉。美智子さんはその経験を糧に、新たな一歩を踏み出した。



1 寸又峡外森神社の参道。もう少しで「落ちない大石」にたどり着きます
2 各地域の神楽に参加。笛は覚えるまでが大変です。たくさん練習しました
3 産業文化祭に参加。茶手揉み保存会の皆さんと
4 おじさんキッチンにも何回か参加しました。どの料理も、とってもおいしくできましたよ
5 フラダンスの愛好会で。ポーズは完璧。踊りは…
6 3月10日。活動を終え帰路につきます。来たときと同じ大鉄、来たときと同じ笑顔で